

中学生の英語に対する意識を変容させるための 体験活動の効果の検討

23A1008 佐藤 有紀奈

要旨

本研究は、中学校英語科の話すこと（やり取り）において、生徒がALTを除く外国人との直接の会話経験が「楽しさ」や「自信」に与える影響、そして、その楽しさや自信と「関心」や「意欲」の関係性を明らかにすることを目的とした。そこで、中学校第2学年を対象に、修学旅行で外国人観光客へインタビューする機会を含めた単元を構想し、実践を行った。そして、生徒が英語での会話に対する意識に関する調査を修学旅行前後で実施した。その結果、実践前や修学旅行での実践に関係なく、外国人との会話の経験の有無による差はなかった。しかし、構造方程式モデリングによる分析の結果、英語の会話における「自信」や「楽しさ」、「関心」、「意欲」の関係性が示唆された。そこで、「自信」を自己効力感ととらえ、考察を行った結果、生徒の外国人との英語での会話における自己効力感を高めるために、成功体験に注目し体験活動の検討が必要であることが、示唆された。

【キーワード】 英語での会話，中学生，自己効力感，成功体験

1. はじめに

(1) 研究の動機

筆者は、中学2年生の時に初めて外国人と直接英語で会話をする機会を得た。拙い英語であったが、直接会話をした経験によって英語を用いて、会話をする楽しさ、自信、そして英語を使うことや学習することに対して、意欲や関心が向くようになった。また、実習連携協力校の英語担当の教員からの話や筆者の授業観察から、生徒は意欲的に学習に取り組むことができおり、特に英語で会話をするに関しては、自分から積極的に英語を使って話す生徒もいることが分かった。一方で、正確な英語、例えば発音や文法、単語を使わなければ伝えたいことが伝わらないのではないかという意識を持つ生徒もいることが分かった。

筆者は、自身の経験と実習連携協力校の生徒の様子から2つの仮説を考えた。1つ目は、英語で直接外国人と会話をする機会を設定し、正確でなくとも自分の英語は外国人相手に通じる、もしくは相手と会話ができたと実感することができれば、英語で会話をするに対して楽しさや自信を持つのではないかと。2つ目が、英語で外国人と会話をするに対して自信や楽しさを感じることができれば、英語で会話をしたいという意欲、そして外国人や外国の文化に対する関心を持つのではないかとという仮説である。

(2) 研究の背景

① 英語教育に求められていること

中学校学習指導要領解説外国語編（文部科学省，2018）では、グローバル化が急速に進展することを背景に、外国語によるコミュニケーション能力は、生涯にわたって様々な場面

で必要になることが想定されており，コミュニケーションに重きを置いて取り組むことが求められると述べている。

しかし，中学校学習指導要領解説外国語編（文部科学省，2018）では中学校の外国語教育の課題として，外国語でのコミュニケーション能力の育成を意識した取組が十分でないとも言われている。特に「話すこと」，「書くこと」の言語活動が適切に行われていないこと，そして「会話」・「即興性」を意識した言語活動が十分でないことなどがあげられている。さらに，生徒の英語力に関しては「習得した知識や経験を生かし，コミュニケーションを行う目的や場面，状況等に応じて自分の考えや気持ちなどを適切に表現することなどに課題がある。」とも記載された。そのため，互いの考えや気持ちなどを伝え合う対話的な言語活動を一層重視する観点から，「話すこと[やり取り]」の領域が設定されている。つまり，現在の英語教育では，会話が重視されている。

また，令和5年度全国学力・学習状況調査質問紙調査（国立教育政策研究所，2023）で，「これまで，学校の授業やそのための学習以外で，日常的に英語を使う機会が十分にありましたか(地域の人や外国にいる人と英語で話す，英語で手紙や電子メールを書く，英語のテレビやホームページを見る，オンラインで他者と英語で交流する，英会話教室に通うなど)」という問いに，中学校第3学年の68.2%が否定的な回答をしている。このことから，半数以上の子どもたちにとって日常生活では英語を使う機会がなく，英語を使ったコミュニケーションは授業内に限られることが明らかとなった。

②外国人との会話を図った先行研究について

外国人と会話をする機会を図り，その中で生徒の関心などの意識の変容を見た授業実践が中学生を対象にどの程度実施されていたか論文検索サイト CiNii Research で確認した(2024年12月15日)。タイトルに「英語」，フリーワード欄に「中学 外国人」を入力して検索した結果，中学生を対象とした論文は7本(朝美，2024；青木・井長，2016；岡崎他，2000；千菊，2001；鈴木他，1994；谷川他，2024；山本，1990)であった。その中で，ALT以外の外国人と会話をする機会を図った授業実践やそれに伴う児童生徒の意識変容をみる論文はなかった。校種を「小学校」「高校」に広げても，該当する論文はなかった。また，本研究の趣旨とは異なるが交流相手をALTとし，生徒の英語に対する意識の変容をみた論文もなかった。

このように，実践を伴う研究の少なさは，桜井・黒田（2004）が，研究と実践の乖離として述べている。桜井・黒田（2004）は，研究者側の問題と学校関係者側の2つの問題を指摘している。研究者側の問題として，授業実践に利用できる研究成果，そして新たな授業・学習方法を教師に共有することが無いことや，共有するにしてもその成果や方法が教育現場の現状に考慮した形でなかったことを挙げている。また，学校関係者側の問題として，教師が研究成果や新たな授業・学習方法をあまり知らない，知っていても利用していないという現状があると指摘している。これらの点を踏まえ，生徒の姿を通して実践を検証し，理論に基づいた指導方法の検討を行っていくことが必要であると考え。具体的には，本研究では，中学生がALT以外の外国人との英語による会話活動という実践が，生徒の意識にどのような変容をもたらすのか新たな知見を得ることができる。そこで，得られた知見をもとに理論とつなぎ合わせ，中学校英語科での会話で生徒に自信や楽しさなどを感じる授業・学習の実践方法を考案する。更に，考案した方法を実践し，検証する。

(2) 研究の目的

本研究では、外国人と実際に直接英語で会話をする機会によって、英語で会話することに対する自信、楽しさ、関心、意欲に変容があるかについて明らかにすることを目的とした。そのために、中学生に修学旅行で外国人観光客へインタビューする機会を設定し、その機会の前後で調査を行って効果を明らかにする。実践として、外国人との会話経験が円滑に行えるように、修学旅行でのインタビューを含んだ単元を構想し(実施計画は資料1を参照)、単元に沿って授業実践(本事案は資料2を参照)を行った。

2. 方法

(1) 調査対象者

大分県内のZ中学校第2学年A組(仮称)38名(男子18名・女子20名)を対象に調査を実施した。

(2) 実践概要

11月6日に実施する修学旅行でのインタビューの前に実践した内容を表1に示した。単元の9時間目が研究に関わる授業の最初であったため、10月24日の9時間目を筆者が担当した。その他の時間については実習連携協力校の英語担当の教師が行った。9時間目から修学旅行までの授業は3時間(第10～12時)とした(表1)。

表1 実践記録

日時	時間など	実施内容
7月30日	実践提案	実践の提案
8月26日	実践打ち合わせ	実践の打ち合わせ
9月27日から	第1時	インタビューを行うことを2年生に伝える
10月21日	事前調査	事前調査の実施
10月24日	第9時	レポートとインタビューの内容等を再度確認 質問内容を考え、他の班にインタビュー練習
10月28日	第10時	質問を再考し、確定。班ごとに大分県の紹介文作成
10月29日	第11時	各自の役割確認と作成
10月30日	第12時	大分県に関する紹介文、挨拶、お礼の文の完成
11月1日	第13時	実際の場面を想定した練習を教員(筆者、英語マイスター)と行う。
11月6日	第14時	外国人観光客にインタビュー(修学旅行当日)
11月11日	事後調査	事後調査の実施

(3) 調査内容及び調査時期

はじめに調査の趣旨と内容について、実習連携協力校の学校長に説明し、許可を得た。調査内容は、令和5年度全国学力・学習状況調査質問紙調査(国立教育政策研究所, 2023)を参考に、外国や外国人の文化に対する関心や外国人との会話経験及び英語での会話に関する認識について、以下のように選択式及び記述式の質問を6項目設定した。

- Q1 [関心] : 外国の人と友達になったり、外国の事についてもっと知ったりしてみたいと思いますか？
- Q2 [意欲] : (ALT を除く)外国人と英語で会話をしてみたいと思いますか？
- Q3 [確認] : 英語を使って楽しんで(ALT を除く)外国人と会話をしたことがありますか？(事前)
修学旅行の自主研修で英語を使って外国人と会話をすることができましたか？(事後)
- Q4 [楽しさ] : 英語を使って(ALT を除く)外国人と会話をすることに楽しさを感じますか？
- Q5 [自信] : 英語を使って(ALT を除く)外国人と会話をすることに自信がありますか？
- Q6 [自由記述] : 外国人と英語を使って会話することに対して、感じていること・感じたことを教えて下さい

事前調査は、修学旅行前の 2024 年 10 月 21 日に実施した。事後調査は 2 年生にとって修学旅行(11 月 5 日から 11 月 7 日)後初めての登校日であった 11 月 11 日に実施した。外国人との会話の経験を問う Q3 の質問を修学旅行前後で変更した。Q1. Q2. Q4. Q5 は 4 件法で、Q3 は、修学旅行前は「経験がある」「楽しくはなかったが経験はある」「経験はない」の 3 件法、修学旅行後は「会話をするのができた」「会話をするのができなかった」の 2 件法で回答を得た。Q1. Q2. Q4. Q5 の回答の選択項目は、資料 3 に記載している。

なお、質問項目に出てくる「会話」は「相手の話や話題を続けたり話の内容を深めたりして、あいづちや共感をする姿」として定義し、回答用紙に記載した。

(4) 手続き

A3 版用紙に質問項目が印刷された面が内側に来るように 2 つ折りにし、出席番号を書く欄と注意事項が記載された外側の面を表にした状態で配付した。口頭で調査の目的について伝え、改めて注意事項として成績には一切関係なく、実習連携協力校の教員が見ることもないということを説明した後、回答を求めた。回答時間は 10～15 分程度で行い、回収時には配付時と同じ状態で回収した。

(5) 分析方法

データは、出席番号で集計し、個人が特定できないようにした。分析対象者は、事前・事後のいずれかの調査で欠席した生徒 4 名と、事後調査で修学旅行中に外国人と会話ができていると回答した 3 名を除いた 31 名(男子 17 名・女子 14 名)である。また、未回答のあるデータに関しては、未回答の質問のみ分析から除外した。また、分析には、js-STAR XR+(release 2.1.3 j)を用いた。

はじめに、外国人との会話経験の有無を問う Q3 の質問から、過去の英語での会話経験の有無によって英語に対する意識に違いが生じているかを確認するために、事前調査を用いて、調査項目毎に 2(英語での会話経験の有無)×2(男女)の 2 要因分散分析を行った。この結果を踏まえ、修学旅行における外国人との会話をする活動によって、英語に対する意識

が変化したかどうかを確認するために、2(男女)×2(修学旅行前・後)の2要因分散分析した。

3. 結果

(1) 過去の英語での会話経験の有無による英語の意識の違い

項目ごとに、2(経験の有無)×2(男女)の2要因分散分析を行った結果、いずれの項目においても、経験の有無における主効果 ($F_s \leq 1.07$, ns)、性別における主効果 ($F_s \leq 0.60$, ns)、経験×性別の交互作用 ($F_s \leq 0.83$, ns)は有意ではなかった。

修学旅行以前において、英語による外国人との会話をする活動の有無により、英語に関する意識に違いがないことが確認された。そこで、修学旅行前の会話経験の有無は、修学旅行後の変容に影響を与えないと判断し、修学旅行における会話経験ができた生徒のみを分析に用いることとした。

(2) 事前・事後調査から見る意識の変容

事前調査と事後調査をもとに2(男女)×2(修学旅行前・後)の2要因分散分析を行った。その結果、Q4[楽しさ]の修学旅行前・後の主効果 ($F(1.29) = 3.34$, $p < 0.10$) のみに有意傾向がみられたが、性別における主効果 ($F(1.29) = 0.25$, ns)、交互作用 ($F(1.29) = 0.00$, ns) は有意ではなかった。その他の項目については、性別における主効果 ($F_s \leq 1.08$, ns)、修学旅行前・後の主効果 ($F_s \leq 1.95$, ns)、交互作用 ($F_s \leq 0.34$, ns)のいずれも有意ではなかった。

4. 考察

(1) 楽しさ・自信が高まると生徒の意欲や関心が高まる可能性があるか

本研究では、2つの仮説を立てた。1つ目は、英語で直接外国人と会話する機会を設定し、正確な英語でなくとも自分の英語は外国人相手に通じる、もしくは相手と会話ができたと実感することができれば、英語で会話をするに対して楽しさや自信を持つことができるのではないかという仮説である。2つ目が、英語で外国人と会話をするに対して自信や楽しさを感じることができれば、英語で会話したいという意欲や外国人、そして外国の文化に対して関心を持つのではないかという仮説である。1つ目の仮説は、得られた結果から外国人と会話する機会を設定し、英語で会話をする経験をしたとしても、生徒の外国人と会話をするに対する楽しさや自信、意欲、そして外国人や外国の文化に対する関心に変容を与えなかった。しかし、2つ目の仮説については、平均点の比較だけでなく、関係性を統計的な手法で検討する必要がある。

そこで、外国人との会話から得た英語の自信や楽しさが意欲や、外国人や外国の文化に対する関心につながるという構造方程式モデルが成り立つのか検討した。事後調査結果を使用し、統計ソフトHAD18.008 (清水. 2016)を用いて構造方程式モデリングを行い、構成概念間で働いている有効なパスについて確認したところ、図1のような構造方程式モデルが成り立った ($CFI = 1.000$, $RMSEA = 0.000$, $SRMR = 0.005$,)。つまり、外国人との英語での会話において、「自信」は、「意欲」、「関心」の順で影響を与えているという仮説が認められた。このことは、英語の会話での「自信」を高めることができれば、「意欲」を高

めることにつながり、さらに「関心」も高めることができる可能性を示唆している。また、外国人との英語での会話で「自信」を高めることは、「楽しさ」を高めることにもつながり、この「楽しさ」からも「関心」を高めることができる可能性も示唆された。

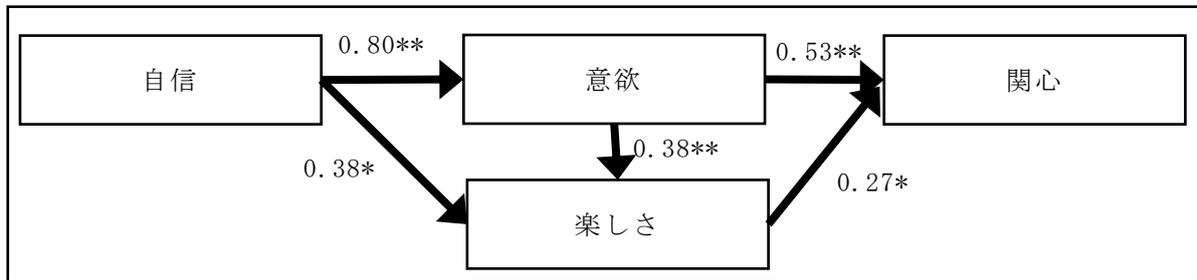


図1 英語の会話の構造方程式モデル

** $p < 0.01$, * $p < 0.05$

(2) どうして「自信」は高まらなかったのか

図1の構造方程式モデルから、今回過去の経験や修学旅行前後での意識の変容が見られなかったのは、生徒が英語の会話に対する自信を持てなかったことが要因であると考えられる。内田（2020）は、「教育現場の教師は、生徒に勉強に対する自信をつけさせることで、学習（勉強）に対する取り組みを改善させようと試みている」と指摘した上で、勉強に対する自信は、「自己効力感（Self-efficacy）」として研究されてきたことを述べている。そこで、構造方程式モデルで示した「自信」を自己効力感として、考察を行う。

自己効力感とは、Albert Bandura（1925-2021）が1977年に提唱した動機づけ理論である。Bandura（1985）は、自己効力感を「自分にはこのようなことがここまでできるのだという考えを持つようになること」であり、「自分自身の判断や決断、努力が原因となつてうまくいったのだと考えるようになるという、認知的な出来事を意味」していると定義づけている。また、Bandura（2012）は、自己効力感を向上させる4つの情報源として成功体験、社会的モデリング、社会的説得、身体的・情緒的状态を挙げている。自己効力感の第1の情報源である「成功体験」という視点から、本研究における活動を検証する。本研究で得られた結果では、体験の前後で自己効力感は向上しなかったことから、生徒にとって成功体験と感じられる活動ではなかった可能性が高い。どのような活動なら自己効力感が向上したのであろうか。

成功体験により自己効力感が向上することは、Bandura（1977, 2012）をはじめとする多数の論文で述べられている。Uchida et al.（2018）は、成功するかしないかが予期できない課題に対するたった1回の成功体験であっても、自己効力感を向上させ、1年以上の長期間にわたり維持されることを、中学生を対象とした比較対照実験により実証している。そこで、修学旅行における外国人との英語による会話活動が、生徒にとって、成功するかしないかが予期できない活動であったのかを考察したい。

研究では、一人ひとりのめあては設定せず、インタビューに向けて事前に班員と協力し、事前準備をした状態で生徒は活動を行った。その結果、修学旅行当日はインタビューで英語を言える状態が当たり前になった。そのため、英語での会話がある程度できる生徒にと

っては、成功できることが予期できる活動であった可能性がある。

また、本研究における活動が、成功を予期できない体験であったものの想定していた以上の困難を伴う会話となり、成功したと感じなかった可能性もある。事後調査の自由記述で、インタビュー相手の発音や喋る測度などが原因で聞き取ることができなかった、インタビュー相手が喋る内容や単語が難しかったという感想がみられた。本研究では、外国人との英語における会話活動に向け準備の時間を確保した。この準備段階の練習では、生徒同士での英語による会話では聞き取れない経験はほとんどなかったと思われる。また、観察した生徒の様子から、生徒同士の英語による会話は、ゆっくりであったり、わかりやすい単語を使っていたりした。予想される困難に対応した準備ではなかったのかもしれない。

では、成功体験をしたのに自己効力感が向上しない可能性はないのだろうか。Uchida & Mori (2012)は、中学生を対象に計算課題を用いた比較対照実験により成功体験が自己効力感の向上に及ぼす効果を検証した。その結果、普段の授業の中で「できない」という経験を繰り返している成績中下位の生徒にとって、1度の成功体験では、自己効力感に与える効果が、限定的であることを見出している。Uchida & Mori (2012)で得られた結果が、英語学習でも適応されるのであれば、修学旅行での外国人との会話活動を成功したと感じた生徒の自己効力感が向上しなかった可能性もある。つまり、英語が苦手な生徒は、今回の外国人との英語による会話活動で使用するための技能において、普段の授業でうまくできない経験を重ねていた可能性はないだろうか。外国人に英語でインタビューをするために準備時間を授業で設けたが、その時間では、英語で書く、話す、聞く、読む、の4技能を使わなければならない。この技能は、日常的に授業で行われており、英語が苦手な生徒は、うまくできないという経験を重ねていたと考えられる。つまり、普段の授業でのうまくできない体験を重ねており、成功体験をなかなか経験していない中で、外国人への英語によるインタビューを行った結果、うまくできたと感じる成功体験であっても、それまでのうまくできなかった経験により、自己効力感に与える影響が、限定された可能性も考えられる。

では、自己効力感を高めるために必要な工夫は何だろうか。次節では、本研究で行った実践の再提案を行いたい。

(3) 実践の再提案

先行研究から自己効力感を高めるには、結果を予期できない体験での成功が1つの方法としてあげられている。この成功体験では、自分の力で解くことができたという生徒がとらえることができるようになり自己効力感が向上すると考えられている。また、Bandura (2012)は、簡単にできる成功体験ではなく、粘り強く努力して挫折や失敗を乗り越えて得た成功体験をすることで挫折や失敗から回復する力のある自己効力感を育てることにつながるとしている。つまり、普段から何度も練習する環境を作りながらその中で予期しない成功体験を積むことも重要となってくる。考察においては、活動内容が成功を予期できるものになった場合や、予期できない体験であったが想定以上に困難を伴う会話になったこと、普段から授業でうまくできない経験を重ねていたことが要因として考えられた。そこで本研究の実践や普段の英語授業でできる工夫として3つのことを再提案する。

1つ目に、生徒一人ひとりに合わせた、成功を予期できないめあての設定である。具体

的には、最低限達成してほしいことを全体のめあてとし、全体のめあてとは別に生徒一人ひとりに合わせた目標を設定するという工夫が考えられる。支援として、生徒は、教員が準備した難易度別に分けためあてから選んだり、生徒によっては自身でめあてを設定したりすることが可能である。また、普段の英語授業で生徒のめあてを設定することができれば、本研究の活動においても自分の英語の不得手を把握しながら自分でめあてを設定することが可能になると考える。

2つ目に、ALT や ICT の活用である。事後調査の自由記述ではインタビュー相手の発音や喋る速度、喋る内容や単語などによって想定以上に困難を伴う会話になったことが考えられた。そこで、ALT や ICT を活用して会話練習を行うことで、英語話者の発音に聞き慣れることや英語を聞きとる力の向上にアプローチできるだろう。また、難しい単語・内容、喋る速度に対しても ALT や ICT の活用を通して会話を続けるためにどうすればいいのか日常的に考えさせることで、状況や場面に応じて対処をとることができるようになる。そのため、どのような場面であっても自分の英語の知識を臨機応変に活用する力をのばすことが可能だろう。この工夫を本研究の活動に入れる場合には、生徒がインタビュー内で想定していない出来事や会話の場面を ALT や英語科教員が設定したり、ICT を使用したりすることがあげられる。この工夫によって生徒は、インタビュー内でどのようなことが起こりうるのかをある程度イメージできるため、様々な状況に柔軟に対応できると考える。支援としては、英語が苦手な生徒にインタビューで想定されるであろう場面や状況に合わせた英語の文をメモするよう指示することがある。その際にはどのようなときに使用するかなど理解できるようにメモしてもらい、インタビュー活動の状況や場面に応じて生徒が文章を選んで使用するよう工夫する。このように相手の回答や状況に合わせて選択することで、学習者が今まで学んだことを自分の英語の力として感じながら使うことができると考えられる。

また、実際の英語話者と会話をする機会が少ない状況や、ALT が毎回授業に参加しない場合においても、生徒の英語の知識を活用できる機会を増やす工夫が求められる。そこで、3つ目の工夫として普段の授業では自分の知識を増やしながら活用・応用する機会を作ることである。この工夫は授業の導入や言語活動などの場面で取り入れることが考えられる。具体的には「アルファベットや単語を並び替えて単語1つや1文を完成させる」、「一問一答形式で使用状況、語彙や表現を学ぶ」、「ペアで会話を続ける練習」などである。さらに、学んだことや使用した文章を教師はどのような場面や状況で使用するのかという事を伝える必要があるだろう。理由として、会話で使用できる表現を学ぶというよりも問題を解くという意識に生徒がなることで、どのような場面や状況で相手に使用するのかというような相手意識を持たずに取り組むことが考えられるためである。支援としては、困ったことがあればクラス全体に共有し、生徒全員で考え解決していくことがあげられる。この支援を行うことで英語が苦手な生徒にとっては語彙や表現などを増やすきっかけとなる。また、得意な生徒にとっては自分の学んできた知識を活用する場面となることで自己効力感を向上させるきっかけとなるだろう。

(4) 今後の展望

本研究では、構造方程式モデルを作成することはできたが、実践までにつなげることは

できなかった。そこで、生徒の自信、つまり自己効力感を向上させるために、今後教育現場での実践で行っていききたい内容について3つの視点から記述する。

1つ目が、日頃から思考・判断が含まれた知識の活用・応用ができる問題の提供である。今回は、自己効力感の中でも成功体験に注目して検証してきた。その中で、成功体験では生徒が主体的に思考を判断するといった自分の力で解けたと感じることができることが重要であるということがわかった。しかし、本研究では準備した問題を口頭で伝えるのみで、自分の力で解けたと思えるような授業・実践を構想してなかった。教育現場に出る際には、主体的に思考し、判断できるような知識の活用の提供を行っていききたい。

2つ目に、教員として生徒一人ひとりに寄り添った指導を行うことである。本研究では、実習生であったため実践に対して限界があった。実践としては1回のみ取り組みとなり、また考察では自己効力感に注目したものの生徒それぞれの学力などは個人情報上考慮することができなかった。1つ目に述べたような思考・判断が含まれた知識の活用・応用の提供において成功を予期できない問題や課題を設定するためには生徒の学力などによって変わってくる。そのため、生徒それぞれを詳しく知った上でめあてや問題などを工夫したり、実践に対しては複数回ALTや外国人と会話をする機会を設定したりしていききたい。また、ALTと行うにあたっては、本研究で生徒が交流した外国人観光客のように英語のみが通じるといった役回りを事前をお願いすることが大事だと考える。

3つ目に他の自己効力感を向上させる情報源についてである。今回は成功体験に注目したが、実際の現場では成功体験だけでなく、社会的説得や、社会的モデリングに注目して取り組むことなどができると考える。例えば、普段からの授業で友人や教師からの社会的説得や協働学習で行う際には学力幅をできる限り統一したうえでの社会的モデリングを見ることがあげられる。

今回得られた研究の成果や気づきを教育現場において実践的に生かしつつ、本研究での課題として今後の研究や実践で引き続き取り組んでいきたい。

引用・参考文献

- 青木 基容子・井長 洋 (2016). 小学校での英語学習経験が中学入学後の英語学習に及ぼす影響について 中等教育研究紀要, 62, 43-58.
- 朝美 淑子 (2024). 災害時における外国人への対応と問題点への考察—災害時に役立つ英語教育の現状と今後の可能性について— 大分大学教育マネジメント機構紀要, 3, 61-67.
- Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a Unifying Theory of Behavioral Change, *Psychological Review*, 84(2), 191-215.
- Bandura, A. (1985). 自己効力(セルフ・エフィカシー)の探求 重久 剛 (訳) 祐宗 省三・原野 広太郎・柏木 恵子・春木 豊 (編). 新装版 社会的学習理論の新展開 (pp. 103-141) 金子書房
- Bandura, A. (2012). On the functional properties of perceived self-efficacy revisited. *Journal of Management*, 38(1), 9-44.
- 文部科学省 (2018). 『中学校学習指導要領(平成29年度告示)解説 外国語編』東洋館出版社

- 国立教育政策研究所 (2023). 『令和5年度全国学力・学習状況調査報告書 全体版【質問紙調査】』 <https://www.nier.go.jp/23chousakekkahoukoku/report/question.html>
- 岡崎 眸・木村 真冬・小西 優花・櫻井 陽子・福田 正恒・古市 由美子・Vassileva Magdalena・守谷 智美・Ohri Richa (2000). 帰国子女教育学級における加算的二言語併用授業の試み：中学校英語科・社会科・日本語教育コース日本人院生・外国人院生のティームティーチングによる支援 お茶の水女子大学附属中学校紀要, 30, 63-104.
- 桜井 茂男・黒田 祐二 (2004). 動機づけ理論は学校教育にどのように活かされたか—応用研究の体系化と授業実践への貢献の評価— 心理学評論, 47, 3, 284-299.
- 桜井 茂男・高野 清純 (1985). 内発的—外発的動機づけ測定尺度の開発 筑波大学心理学研究, 7, 43-54.
- 千菊 基司 (2001). 中学生のディベート活動の実践例と生徒の英語の特徴 中等教育研究紀要 広島大学附属福山中・高等学校, 41, 119-124.
- 清水 裕士 (2016). 「フリーの統計分析ソフト HAD：機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案」 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 鈴木 康平・田口 広明・田口 恵子 (1994). AET の存在が中学生に及ぼす効果：AET の導入が中学生の, 外国人や英語に対する態度, 学級雰囲気, 学級に及ぼす効果 熊本大学教育学部紀要 人文科学, 43, 307-315.
- 谷川 夏菜子・濱口 真由・川越 美和・日下 智志 (2024). 中学生が抱える英語学習に関する不安の比較—高知市立義務教育学校土佐山学舎の特別な英語教育カリキュラムに着目して— 鳴門教育大学国際教育協力研究, 17, 29-34.
- Uchida, A., & Mori, K. (2012). The Effect of Contrived Success in Calculation Tasks on the Self-efficacy of Junior High School Students, *World Academy of Science Engineering and Technology*, 68, 272-275.
- Uchida, A., Robert, B., Michael., & Mori, K. (2018). An Induced Successful Performance Enhances Student Self-Efficacy and Boosts Academic Achievement. *AERA Open*, 4(4), 1-9.
- 内田 昭利 (2020). 中学生期における「暗示」の教育的効果—Evidence の可能性— 風間書房
- 山本 岩男 (1990). 中学二年における日本人教師と外国人講師との協同による英語指導の試み 名古屋大学教育学部附属中高等学校紀要, 35, 53-60.

【資料 1】 実施計画

時	節/ 小節	学習活動	備考欄・指導上の留意点
1	Get Part1 文法事項 1 (規則動詞の過去形)	形容詞の比較級(-er/-est)を理解し, それを含む英文を即興で話したり, 即興で伝え合ったり, 正確に書いたりする。	
2	Get Part2 文法事項 2 (不規則動詞の過去形)	形容詞の比較級(more/most)を理解し, それを含む英文を即興で話したり, 即興で伝え合ったり, 正確に書いたりする。	
3	Get Part3 文法事項 3	同等比較(as ... as ~)・副詞の比較級を理解し, それを含む英文を即興で話したり, 即興で伝え合ったり, 正確に書いたりする。	
4	Get Part1 本文内容	形容詞の比較級(-er/-est)を理解し, それを含む英文を聞いたり読んだりして内容をとらえる。	
5	Get Part2 本文内容	形容詞の比較級(more/most)を理解し, それを含む英文を聞いたり読んだりして内容をとらえる	
6	Get Part3 本文内容	同等比較(as ... as ~)・副詞の比較級を理解し, それを含む英文を聞いたり読んだりして内容をとらえる。	
7	Use Read	歓迎会で行うアクティビティの得票数と活動例をまとめるために, 姉妹校の生徒の意見について書かれたメールを読んで, 要点をとらえる。	
8	Use Read	歓迎会で行うアクティビティの得票数と活動例をまとめるために, 姉妹校の生徒の意見について書かれたメールを読んで, 要点をとらえる。	
9 本時	Use Write	第 1 時で伝えたゴールイメージと, 修学旅行で外国人観光客に行きたい観光地や食べたい食べ物などをインタビューすることを再度確認し, どのように質問をすればよいか考える。また他班の人にインタビューし練習を行う(練習①)。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 修学旅行の自主研修の内容と絡めて学習を行う。 ・ 班ごとに何を尋ねるインタビューにするのか考えさせ, 質問を作らせる。 ・ 5W1H のような質問で作成させる
10	Use Write	実際に外国人観光客にインタビューするときに留意すべきことを考え, 外国人観光客とのやり取りを具体的にイメージさせる。 前時に考えた質問を確認し, クラスの人(班のメンバー以外)や先生にインタビューを行う(練習②)。	<ul style="list-style-type: none"> ・ ロールモデルを見ることで, 挨拶や自己紹介など実際のインタビューをするときの留意事項に気づかせる。 ・ 実際の会話練習になるため, 先生にインタビューを

		また、大分に関する紹介文を作成する。	<p>するようにしてわからなかったことなどにも当日対応できるように共有する時間を設ける。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外国人観光客にインタビューすることについて、不安に思っていることや期待していることなど、を振り返りに書かせる。
12	修学旅行	外国人観光客にインタビューする。	
13	Use Write	外国人観光客へのインタビュー結果や事前に行ったクラスへのインタビュー結果を整理して、レポートを書く	<ul style="list-style-type: none"> ・インタビューをしてどのようなことを感じたのか、感想を書かせる(修学旅行中に書かせている場合は、それを踏まえて書かせる) ・自分なりの感想を構想メモなどに取り入れる。また、日本語をまず使用して取り組ませる必要がある。 ・比較級や最上級, as...asなどの構文を利用したレポートを作成させる。
14	Take Action! Listen4	おすすめの場所を提案するために、わかば駅周辺の施設やお店について書かれた観光マップを読んで、必要な情報をとらえる。	
15	Take Action! Talk4	誕生パーティーでの自分の役割を知るために、打ち合わせの内容について話された英文を聞いて、必要な情報をとらえる。	
16	GET Plus 5	疑問詞(how など)+ to ...の意味や働きを理解し、それを含む英文を即興で伝え合ったり、正確に書いたりする。	
16	Reading for Information 3	公園の利用方法を理解し、質問に答えるために、利用時間やルールなどについて書かれた公園の看板を読んで、必要な情報をとらえる	
17	Project 2	海外の姉妹校の修学旅行先を提案するために、姉妹校の生徒が日本でしたいことについてのアンケート結果を読んだりして、おすすめの行き先の情報や自分の考えを、簡単な語句や文を用いてまとまりのある文章を書く	

【資料 2】 本時案

(1) 題材 Lesson 5 Things to Do in Japan USE Write レポート

(New Crown English Series 2)

(2) 本時のねらい

外国人観光客へインタビューした内容を踏まえたレポートを書くために、インタビューする内容を考え、質問の内容を考えたり班で情報を整理したり、インタビューの文意が伝わるかどうか確認するやり取りを通して、インタビュー内容を決めることができるようにする。(話すこと)(思考・判断・表現)

(3) 本時の評価規準 (思考力・判断力・表現力)

外国人観光客にインタビューする内容について、インタビューの文意が伝わるかどうか確認するやり取りをしながら、インタビューの内容を決めている

(4) 展開 (50 分)

学習活動	時(分)	指導内容及び指導上の注意点	評価方法
1 Warming up (1) 英語で あいさつをする	1	○ 英語であいさつを行う	
めあて：外国人にインタビューするために、質問する内容を班員と決めて練習しよう			
2 本時の学習をする (1) 本時の内容の確認	41 (5)	*プレゼンを見せながら授業を進める ○単元のゴールイメージや授業のねらい、 修学旅行で外国人観光客に英語でインタビューすることを確認 (2)に関する説明 ・Q1:『あなたの国で the best○○は何ですか』を聞く →bestのあとは名詞であることを確認 ・Q2.Q3:インタビュー相手の国についてもっと知ることができる 質問文を考える	
(2) Q1.Q2.Q3の 内容を生徒個人が考える	(5)	○ Q1.Q2.Q3で質問したいことを個人でノートにメモするよう指示 ・(3)で情報を共有するので、大きめに書くことも指示する ・机間指導で内容に思いつかない生徒に対しての支援を行う ・基本的に英語でメモを取ってもらうが難しい場合は日本語でメモしてもらう *予想される生徒の反応 ・食べ物/場所 ・日本のこと など	
(3) 班ごとにインタビュー の質問内容を決めてワ ークシートに質問文を 書く	(7)	○ 共有しやすくするために、ノートを班員に見せて何を メモしているかいつでも見ることができる状態にするよう指示 ・決まったらワークシートに質問を書き、 Q1～Q3を読めるのか班で確認するように指示する	

<p>(4) 全体確認 (中間評価)</p> <p>(5) グループで再度考える</p> <p>(6) 英語の質問がそれぞれ 文意として正しく伝わ るか他の班員の人と Q2.Q3についてやり取 り練習する</p> <p>(7) やり取り練習で困った こと、質問に関しても らったアドバイスなど を班員に共有</p> <p>3 本時の振り返り</p>	<p>(8)</p> <p>(5)</p> <p>(7)</p> <p>(4)</p> <p>3</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・他に質問したいことがあれば、フリー質問に書くように指定 ・班員でお互いの進捗を確認/助けあうように指示 ・決まったら質問文がそれぞれ読めるのか生徒同士で確認 <p>○ 全体に共有すべきことを伝える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループで出ている質問の共有 →面白い質問を写真にとって視点を広げる ・表現で困っていることの確認 ・質問の内容の確認 <p>* 中間評価をもとに再度困りについて考えてもらう</p> <p>○全員が質問する側や質問をうける側それぞれを一度するよう指示</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作成した質問の意味が通じるのかなどの確認で行う ・移動する際には、特に指定しない ・質問する際に表現等で気になったことがあれば アドバイスをするように指示 ・アドバイスを受けた場合は、メモを取ることも伝える <p>* 予想される生徒の姿</p> <ul style="list-style-type: none"> ・質問内容や表現が伝わりにくかった <p>→次回の授業で表現とか変えたり、もっと会話が続いたりできるように練習しようと伝える</p> <p>○ 次回の授業について触れる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・次回の授業ですることについて触れる ・どのようなことができたか、頑張ったことや意識したこと、 次回は何かができるようになりたいかを書いてもらう 	<p>*観察</p>
--	--	---	------------

【資料 3】 事前・事前調査用紙

答えとして当てはまるものに一つ✓を入れて下さい。

*質問に出てくる「会話」は、

【相手の話や話題を続けたり話の内容を深めたりして、あいづちや共感をする姿】
を指します。

例) 自分 『こんにちは！今、何しているの？』
相手 『今、好きな俳優さんのドラマ見てるんだ』
自分 『へえ！なんていうドラマなの？好きな俳優さんってだれ？』・・・

- Q1. 外国の人と友達になったり、外国の事についてもっと知ったりしてみたいと思いますか？
- 思う どちらかといえば思う
どちらかといえば思わない 思わない
- Q2. (ALT を除く) 外国人と英語で会話をしてみたいと思いますか？
- 思う どちらかといえば思う
どちらかといえば思わない 思わない
- Q3. (事前) 英語を使って楽しんで(ALT を除く)外国人と会話をしたことがありますか？
- 経験がある 楽しくはなかったが経験はある 経験はない
- Q3. (事後) 修学旅行の自主研修で英語を使って外国人と会話をすることができましたか？
- 会話をするのができた 会話することができなかった
- Q4. 英語を使って (ALT を除く) 外国人と会話をすることに楽しさを感じますか？
- 感じる どちらかといえば感じる
どちらかといえば感じない 感じない
- Q5. 英語を使って (ALT を除く) 外国人と会話することに自信がありますか？
- 自信がある どちらかといえば自信がある
どちらかといえば自信がない 自信がない

Q6. 外国人と英語を使って会話することに対して、感じていること・感じたことを
教えてください

ご協力ありがとうございました